

オバマと蠅：神の目には bullshit（牛の糞、たわごと）

渡辺 久義

2017/ 02/ 13

オバマにたかる蠅の話は、ネット世界ではかなり有名になっていて、いろんな意見があるが、この不思議な現象自体を知らない人が多いだろう。Bullshit 云々というのは私自身の解釈である。知っている人には、私の言いたいことはわかると思う。今これを宙ぶらりんにしておいて、次のエピソードを読んでいただきたい。

2015年9月、ニューヨーク国連総会で、プーチン露大統領はこう発言した。（「プーチンがオバマに訊く：国家主権とは何か？」<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/151009.pdf>）
真実をついた胸のすく演説であったにもかかわらず、新聞はこれに限らず、いっさいプーチン演説を載せたことがない。載せるのは、プーチン悪魔化のプロパガンダだけである。これは新聞のなすべきことではない。少し長いが引用する。プーチンの言葉を初めて聞いた、という人も多いはずである——

我々の同僚たちがここで言及していた国家主権とは、どういう意味ですか？ それは基本的に自由ということです。あらゆる人、あらゆる国家が、自分たちの未来を選ぶ自由をもっているということです。そこでこれは、いわゆる国家権威の合法性という問題につながっていきます。人は言葉をもてあそんで、勝手に操作することはできません。国際法において、あらゆる用語ははっきり定義され、透明で、あらゆる人によって同じように解釈されなければなりません。国家は、これだけが正しいと誰かが宣言した、同じ発達のモデルに、みんなが従うように強制されるべきではありません。我々は過去の時代を思い出すべきです。[つづいてソ連時代の悪い例を自省、省略]

しかし他人の過ちから学ぶ代わりに、それをあえて繰り返し、革命の輸出を続けようとする人たちがいます。ただ今度の場合、それは“民主主義”革命です。すでに前のスピーカーが言及された、中東や北アフリカの現状を見てください。もちろん政治的・社会的な問題が、この地域では長いあいだ山積してきて、人々は変化を求めていました。しかし現実の結果はどうでしたか？ 改革をもたらす代わりに、侵略的な介入が政府の諸機関と地方の生活様式を、乱暴に破壊しました。民主主義と進歩の代わりに、今あるのは暴力、貧困、社会的災害、それに、生きる権利さえ含めた、人権の全面的な無視です。私はこういう状況をつくり出した人々に、どうしても訊いてみたい——あなた方は、

少なくとも自分のやったことを理解しているのですか？ しかし、おそらくその質問には答えてもらえないでしょう。なぜなら彼らは、傲慢、例外思想 (exceptionalism)、それに特権的免罪 (impunity) を基盤とする彼らの政策を、決して放棄したことがないからです。

プーチンの歴史の判断は客観的で、礼儀を保ちながらも、言うべきことはずばりと言っている。これに対して、オバマはこう言った――

宗教的な派閥主義や、狭小な民族主義や、戦闘的愛国主義に基づいて、他国を悪魔化することに依存する政策や連帯は、一時的には強さに見えるかもしれませんが。しかし時がたてば、その弱さが現れてきます。そして歴史が語るのは、この種の政策によって解き放たれた暗い力は、確実に我々すべてを、より不安定にするということということです。我々の世界は、かつてそういう状況にありました。我々は戻ることによって、何も得るものはありません。

これだけ読むと、特に問題はないように見える。しかしこれは、プーチンの指摘した、アメリカの傲慢、アメリカだけは国際法などの規制を、いっさい免除されているという、勝手な「例外思想」を土台にして、世界を裁く者として言っているのである。彼の演説は全体として、世界はアメリカに従ってこそ、平和が実現するのだというものだった。よい教訓は日本であって、日本はアメリカに楯突いたため、ああいう目に逢ったではないか。では、アメリカが介入した結果、無数の死者と破壊によって中東は荒廃したが、それはどうか？ そんなことは彼には問題ではない。平和とは、アメリカに刃向かう者がなくなることだからである。

この論文は、結論にこう言っている――「オバマは自分自身の演説の教えに従うべきである。オバマは、敵を“悪魔化する”ことは狭い“民族主義や戦闘的愛国主義”につながると言った。オバマの演説こそ、まさに“戦闘的愛国主義”に満ちている。実際、アメリカ政府は、第二次大戦が終わって以来、“戦闘的”外交政策をずっと取っている。プーチンは本当の政治家であり、オバマは一貫して好戦的政治家の話し方をしている。・・・」

オバマ (や彼を取り巻く政府高官たち) は、どこから見てもりっぱな戦争犯罪人であるにもかかわらず (<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/170112.pdf>)、我々は、間違っても“戦争犯罪人”などという言葉を使わないように躡けられ、逆にプーチンは人類の敵であるかのように教え込まれている。そのため、オバマのこの国連演説を聞いても、何の問題もないかのように、プーチン以外に聞きとがめる人もいない。オバマは、彼を使う権力者から見れば、この上なく模範的な“アンクル・トム” (白人に従う卑屈な奴隷) である。同じように、我々の主流メディアも、ワシントンから見れば、この上なく模範的な

アングル・トムとして機能している。

そこで冒頭へ戻ることにしよう。適当でいいのだが、**Obama and Flies** というような英語を、検索欄に放り込んでみていただきたい。オバマの顔に蠅のとまっているたくさんの画像が出てくる。このうち、数匹以上も蠅がたかっているのは、ほぼ間違いなく作り物だろう。しかしこの中で何枚かは、現実とその動画ビデオが存在するのだから、本物である。(ヒラリーにも一度そういうことがあって、ここに混じっている。)

これは滑稽であると同時に、ここに超自然的な、象徴的意味を認めざるをえない。そもそもオバマがインタビューされるような場所は、蠅(しかもかなり大型の)が出没するような場所ではない。しかも、これが起こったのは1度や2度でなく、私が見ただけでも数例ある。読者にご自分で調べてご覧になるとよい。新たな発見があるだろう。こんなことは偶然ではありえない。何か未知の力が、喋ろうとするオバマを妨害するか侮辱するために、こういう現象を起こさせているのかもしれない。これに言及する人たちも、ほとんどが、説明はできないが、何かサタンの現象だろうと言っている。

「下らん!」「何を言いやがる!」というときに“**Bullshit=牛の糞**”と言う。これを起こさせている超自然的力が、オバマの人格や発言に対して **Bullshit!** と言うために、牛の糞にたかる蠅を使ったとも考えられるのではなかろうか?

たぶん一番多い解釈は、『蠅の王』(ウィリアム・ゴールディング)という小説と結びつけるもので、**Lord of the Flies** とは、聖書に出てくる悪魔「ベルゼブル」のことだという。この小説は、無人島に流れ着いた少年たちが、覇権争いをして殺し合いをするようになり、哀れな末路になるという筋書きだから、オバマの顔の蠅は、**New World Order** の末路を暗示するものとも考えられる。